

II 歴代所長のプロフィール



掛谷 宗一（広島県 明19.1.18～昭22.1.9）

〔初代〕 明治42年10月東京帝国大学理科大学を卒業後、第一高等学校教授、東北帝国大学助教授、東京文理科大学教授、東京高等師範学校教授などを歴任し、昭和10年4月から昭和21年10月まで東京帝国大学理学部教授を勤め、昭和19年9月から理学部長を勤めた。さらに、昭和19年6月から昭和22年1月に逝去するまで、兼任期間を含めて統計数理研究所の初代所長を勤め、統計数理研究所の創設期の基礎づくりに貢献した。

同氏の正数係数の代数方程式の根の限界についての研究は、『掛谷の定理』として世界的にも知られており、また連立積分方程式に関する一連の研究論文により帝国学士院恩賜賞を受賞した。さらに大正11年から20余年にわたって学術研究会議会員となり、昭和21年には会長を勤めるなどして、わが国の学術進展に多大の貢献をし、昭和16年に勲二等瑞宝章を授与された。



末綱 恕一（大分県 明31.11.28～昭45.8.6）

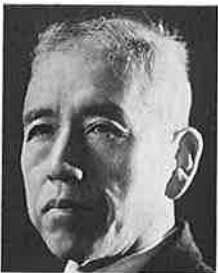
〔第二代〕 大正11年3月東京帝国大学理学部数学科を卒業後、九州〔第五代〕 帝国大学助教授、東京帝国大学助教授を歴任し、昭和10年から昭和34年3月まで東京帝国大学理学部教授を勤めた。

同氏は、昭和19年統計数理研究所の創設にあたり「設立準備委員」を勤め、創設後も研究所参与、所長（兼任）、評議員として、研究所の管理運営に参画し、今日の統計数理研究所の基礎づくりに貢献した。

さらに同氏は、昭和33年4月から昭和45年8月6日に逝

去するまで統計数理研究所長を勤め、その間、第4研究部（情報科学理論）の創設準備など研究部門の整備拡充を図るとともに、他に先駆けて大型電子計算機システムの開発導入を行うなど研究環境の強化に力を注ぎ、在任中の昭和43年11月には研究所独自の新庁舎の建設をみた。

同氏は、解析的整数論に関する数多くの研究論文を発表した。特にL関数を解析的に応用したイデアル論に関する関数の最大位数についての論文は、世界的にも広く知られている。また、フォン・ミーゼス流の理論を紹介した『確率論』は、この分野での先駆的業績として評価された。さらに日本数学会理事長、科学基礎論学会理事長等を歴任するとともに、昭和22年から20余年にわたって学士院会員としてわが国の学術進展に多大の貢献をし、昭和44年に勲二等旭日重光章を授与された。



窪田 忠彦（東京都 明18.2.27～昭27.8.31）

〔第三代〕 明治43年10月東京帝国大学理科大学大学院を卒業後、第一高等学校教授、東北帝国大学助教授などを歴任し、大正4年4月から昭和22年8月まで東北帝国大学理学部教授を勤めた。さらに、昭和24年11月から昭和27年8月まで統計数理研究所長を勤め、分散した施設という多難な時期での研究所の管理運営に尽力した。

同氏は、卵形線と卵形面に関する研究や歯車の幾何学などを含め代数幾何学や変分学に関する論文を数多く発表し、発足当時の東北帝国大学数学教室の黄金時代を築く牽引者の一人として活躍した。さらに昭和2年から学術会議会員、昭和11年7月から昭和14年3月までは東北帝国大学理学部長、昭和22年からは学士院会員となるなどして、わが国の学術の発展と高等教育の推進に多大の貢献をし、昭和19年に勲一等瑞宝章を授与された。



佐々木達治郎（岡山県 明27.8.25～昭48.10.19）

〔第四代〕 大正11年3月東京帝国大学理学部物理学科を卒業後、東京帝国大学航空研究所員、陸軍少将などを歴任し、昭和11年から昭和21年3月まで東京帝国大学工学部教授を勤めた。同氏は、昭和27年9月から昭和31年10月まで統計数理研究所長を勤め、それまで数ヶ所に分散していた研究所の施設を、現在地にあった総理府統計局庁舎の一部への統合を実現させ、創立以来10余年にして全所員が一堂に会して研究業務を行えるようにした。また、計算機器の開発の重要性を逸早く察知して、乱数作成機やリレー式万能自動計算機の開発を行い、研究環境の強化に努めた。

同氏は、航空計測器の研究、特に低温低圧を実現する風洞を設置して、飛行機用速度計の誤差を自動的に補正する計器の開発を行った。さらに、風洞壁の影響に関する理論的研究は、国際的にも先駆的なものとの高い評価を得た。これらの学問的業績により、昭和42年に勲二等瑞宝章を授与された。



河田 敬義（東京都 大5.1.15～平5.10.28）

〔第六代〕 昭和13年3月東京帝国大学理学部数学科を卒業後、東京帝国大学理学部助手、東京文理科大学助教授、東京大学教養学部教授などを歴任し、昭和28年から昭和51年4月まで東京大学理学部教授を勤めた。退官後は昭和61年3月まで上智大学理工学部教授を勤め、40余年にわたり大学教育に従事した。その間、昭和46年3月から昭和49年2月まで統計数理研究所長を兼任し、研究所の第5研究部（予測・制御理論）の創設など、研究所の管理運営に尽力した。

同氏の研究は、代数的整数論から確率論に至る数学の幅広い分野で重要な業績を残し、特に類構造の理論を代数体だけでなくアーベル拡大の理論に適用して類体論を再構成した一連の論文は、国際的にも高い評価を得た。また、学内外の数多くの委員会委員を兼務し、特に理事長の期間を含め日本数学会の理事を長年にわたって勤めるなど、わが

国の学術行政面での精力的な活躍は特筆に値する。これらの学問的業績により、昭和52年に紫綬褒賞、昭和61年には勲二等旭日重光章を授与された。



林 知己夫（東京都 大7.6.7～）

〔第七代〕 昭和17年3月東京帝国大学理学部数学科を卒業後、昭和21年12月統計数理研究所研究員となり、第2研究部長などを歴任し、昭和49年3月から昭和61年3月まで統計数理研究所長を勤めた。同氏は、第6研究部（行動に関する統計理論）の新設や施設の増設など、研究所の整備充実と管理運営に務め、特に研究所の国立大学共同利用機関への改組転換を円滑に進めることに尽力した。さらに、総合研究大学院大学の創設準備にも積極的に協力した。

同氏の本研究所における研究活動は、40余年の長きに及び、研究業績も国民性の統計的研究・意識の国際比較方法論・動く調査対象の標本調査論など多岐にわたっており、特に質的データに数値を付与するという『数量化理論』は統計的方法の適用範囲を飛躍的に拡大させた。わが国の統計学理論の発展、確立並びに方法論の開発、さらには学際的研究交流の発展や後進の指導育成などに大きく貢献し、昭和56年に紫綬褒章、平成元年には勲二等瑞宝章を授与された。



赤池 弘次（静岡県 昭2.11.5～）

〔第八代〕 昭和27年3月東京大学理学部数学科を卒業後、昭和27年4月統計数理研究所研究員となり、第1研究部第2研究室長、第5研究部長、予測制御研究系研究主幹を歴任し、昭和61年4月から平成6年3月まで統計数理研究所長を勤めた。同氏は、昭和60年4月文部省所轄機関から国立大学共同利用機関へ改組転換された後の研究所の研究基盤の整備充実と管理運営の基礎の確立に尽力した。また昭和63年10月に創設された総合研究大学院大学の運営にも、統計科学

専攻長として積極的に協力し、創設期の総合研究大学院大学の円滑な発展に尽力した。

同氏の研究方針は、一貫して現実の問題に根ざした統計学の発展にあり、特に時系列解析の理論とその実用化の発展に尽した。特に『赤池情報量規準』と呼ばれる独自の方法を導入し、今日の統計学研究の潮流に画期的な影響を与えた。その成果は統計学の枠組みを飛躍的に拡大しつつあり、わが国を代表する統計学者として国際的にも高い評価を得ている。これ等の学問的業績により、昭和47年石川賞、昭和55年大河内記念技術賞、平成元年に朝日賞および紫綬褒賞を授与された。